
Butterfly

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Butterfly

【NNコード】

N4326X

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

新一の潜入調査モノ。

江羅利高等学校に通うギャル、

早乙女アゲハの父に麻薬密売の容疑が掛けた。

しかし、証拠は不十分。

アゲハの友達になり、証拠を見つるという仕事を新一は任された。

新一はアゲハに近づくが、アゲハは相当な厄介もので・・・。

「適役がおひんのだよ・・・」

「はあ・・・」

「で、この役を工藤君にやつてしまひこんだナビ
駄目かな?」

「・・・え?」

警視庁の出来事であった・・・

「え？ 潜入調査？」

「そう。」

「なんの？」

「江羅利高校に通つてゐる生徒の親が
麻薬密売の容疑がかかつてゐるらしい。
なんとか証拠を掴みたいらしいんだ。
早乙女・・・って言つてたかな。」

「で、新一に・・・」

「その生徒に近づいて、家に潜り込み・・・
麻薬を見つける。」

「危険じゃないの？」

「危険・・・じゃない。」

「嘘ばっかり。」

「あ・・・やつぱりわかるか。」

「当たり前でしょ？」

蘭は心配せつな顔で新一を見つめた。

「その生徒って女の子?」

「さあな。俺、聞いてねえもん。」

「浮氣、しないでよね。」

「しねーよ。」

「浮氣したら私がだつてこいやるんだから。」

「それはマジで勘弁。」

「約束だからね。」

「ああ。」

「じゃ、荷物詰めなきやー。

新一、しばらくマンション借りるんでしょ?」

「まあな。

先生とかクラスメイトに押しかけられたら困るじゃ。」

「うん。」

「しばらく、あえないね。」

「電話ならこいつでもできんだろ。」

「だけど・・・」

「心配すんなよ、一応一ヶ月の予定だからさ。」

「わかつた。」

出席日数は大丈夫?」

「ああ。先生たちもわかつてくれたから・・・
向こうで出席した分、こっちにしてくれるってさ。」

「それっていいの?」

「いいんじゃねーの?」

新一の適当さに蘭は頭を抱える。

「大丈夫かな、これで・・・」

「唯一心配なのは、料理だよな・・・」

「レトルトとかお惣菜は駄目よ?」

「はーはー・・・」

潜入調査といつのはあまりにも急な話しどで。

荷物を詰めるのに一生懸命になつていた。

「制服は?」

「ん? ああ、警部たちがそろえてくれるからじご。マンションの家具も全部。」

「わつか。なら、安心だね。」

「ああ。」

「怪我だけ、しないよ?」

「わあーつむるよ。」

「・・・」

急に黙り込む蘭を新一は不思議そうに覗き込んだ。

「どうした？」

「・・・ねえ、新一・・・

今日、泊まつてこられた。つて書つたら・・・だめ?」

「え?」

「やつぱつ、一ヶ月も離れるの・・・せびしこもん。
今日へりこ、一緒にこもれてよ・・・一ヶ月分。」

「だめなわけねえよ。

でも、ねつねつやんがさ・・・」

「お父さん、今日は町内会の温泉に行つてこないの・・・」

「やつか・・・

「んじや、今日は泊まつてけよ。夕飯よろしくな。」

「うそー。」

「あ、それと・・・今渡すのも変なんだば・・・」

新一が鞄を「いや」とし始めた。

「なに」「マジ。」

「合鍵。」

「元の…」

「ああ。」

「もりつていいの？私が。」

「あつたりめえだろ？」

今日つべつたんだ。その後潜入調査つて聞かされて……

「タイミングが悪かつたね。」

「だろ？」

ま、一応渡しとく。

あつ、掃除しつゝとかじやねえからな？」

「わかつてるよ。」

蘭は嬉しそうに鍵を眺めた。

Butterfly 1 (後書き)

新連載始めました！！

これから、いろんなことがありますか・・・（あるんかい・・・）

どうぞ、宜しくお願ひ致します

「えー、今日から転校してきた藤峰君だ。

辺りで「上藤新一に似てる・・・」

と口々に言っていた。

（そりや似てるよな・・・本人なんだか。）

まあ、変装してたら、本人だなんて気づくやついね♪と思つた。

（

「え？・偽名？・」

「ああ。どうすればいい？」

前の晩、新一は蘭に相談していた。

「江戸川コナンくんでいいんじゃない？」

「お前、嫌味だろ。」

「だつて……」

「コナンなんてからかわれるに決まってる。」

「別にいいんじゃない？」

お父さんがコナン・ディルのファンだったんだ。で。

「完璧嫌味だよな、それ。」

「別にー？」

蘭は面白げに笑った。

「あ、いいの考えたー。」

「え？」

「じゃ、藤峰、簡単に自己紹介。」

「はい。帝丹高校から來ました。

藤峰新ふじみねしんです。これからよろしくお願ひします。」

「はい、拍手一。」

ぱちぱち

（藤峰新・・・つたぐ、蘭の考え方そつな名前だよな・・・。）

『だつて、工藤君つて・・・新一つて・・・他の女の子に言われるの嫌なんだもん。』

（なーんて、いつになく素直に言つてしまふ・・・。）

「じゃ、藤峰の席は・・・早乙女の隣だな。」

ピクリ

『早乙女』の言葉に新一は耳を傾けた。

(「いや、好都合……」)

情報では、優しく、おとなしく、清楚で可憐。

大和撫子タイプらしい。

「あそここいつるのが早乙女だ。」

そこに座っていたのは……

赤毛……多分、染めたのだろう。

パーム。

耳にはピアス。

制服はだらしがない。

綺麗な顔立ちなのはわかる。

が、化粧をしていて凄くもつたいない。

「よひじべ。

（なんか、情報と違つよつたな・・・）

席に座る際、新一が軽く声をかけた。

「チッ」

誰かが舌打ちする。

主は隣に座る、『咲之女』と呼ばれた女だった。

「咲之女へ話しかけてんじやねーよ。」

ボソッ

と言つてはいたが、新一には完璧に聞こえていた。

（情報とまったく違つてゐる元細つのは俺だけか？）

（数学の時間）

「早乙女さん。俺、この教科書まだ無いんだ。
見せてもらつていいかな？」

これは、仲良くなるためにわざと忘れてきた。

もちろん、教科書がまだ無いなんということはない。

少なくとも、同じ県内だからだ。

ドサッ

新一の机に教科書が乱暴に置かれる。

「え？」

「あたし、使わないから。」

「でも、授業・・・」

「うつせえな、あたしは授業する気がねえんだよ。
わかつたら、話しかけてくんなん。
んで、近寄んな。やさ男。」

(か、可愛くねー・・・)

新一は顔を引ひき寄せた。

Butterfly 2 (後書き)

こんばんわ～ 桜桃です。

アゲハちゃん、一筋縄ではいきません。

ただのギャルじゃないんです。

まだまだ挫けちゃいませんよ、新一は・・・！（笑

「俺、相沢ってんだ！よろしくな。藤峰。」

「ああ、よろしく。」

「私、三神杏里。よろしくね、藤峰くん。」

何人か、新一の机に集まってきた。

隣の『早乙女』はいない。

「あのや、一つ。聞きてえんだけど。」

「なーに？」

「隣のやつ。」

「まさか、藤峰くん・・・」

「アゲハを好きになっちゃつた?」

「だよね・・・見た目は可愛いもん。早乙女アゲハ。」

「名前も力タカナつてところが、カッコいいよね。」

「いや、別に好きとかじゃねえんだけど・・・
ただ無愛想な奴だな、って思つてよ。」

「だよなー。」

「俺、1年の時初めて早乙女見てさ、
一眼ぼれしたもん。まさかああいう奴だと思わなかつたけど。」

「誰かの話しじゃ、清楚で可憐で大和撫子タイプつて聞いたんだけど。」

新一の言葉をバカにしたように笑つた。

「えー、誰から聞いたの?」

「全く正反対じやん、早乙女アゲハ。」

「私らも結構街では顔の広いギャル一味なんだけさ。
あの子もつとすごいもんね。」

「うんうん。昔暴走族の上の人と付き合つたこともあるひじこじ。」

「ヤクザとも付き合つたらしいよ。」

「そんな情報まであるのかよ。」

「うわさでね、結構流れるのよ。」

「怖い人と付き合つてるから、アゲハには誰も近づけないの。」

「それに、家も金持ちだしね。」

「この学校だつてアゲハの両親が資金出したらしき。」

「この周辺のカフェや喫茶・・・デパート・・・

ほとんどが早乙女家の資金だから、誰もアゲハには文句言えないの。」

(なるほどな・・・)

「でも、アゲハの家つて何やつてんのかしら。

ほーんとなぞ。どつかの財閥・・・つてわけでもなさそりだし。」

「不動産屋とかじゃないの?」

「かもね。」

「毎月のお小遣いとか半端ないんだろうね。」

「香水も化粧品も全部高級品だもん。」

「そんなこと、わかるのかよ。」

「わかるわよ。」

「女ってことね。」

新一はすうと考へこむ。

「アゲハの話しそう、ずっと面白に話あるんだけどさ。」

「えーなになー?」

「A組の中山紀伊子! 彼氏できたらじこよ。
しかも社会人で医者!」

「マジー! ?

新一が考へている隣で、バカ騒ぎが始まった。

ガラッ

「起立、気をつけ、礼。」

「お願いします。」

「着席ー。」

「おつと・・・早乙女はいないのか?」

「多分サボりだと思いまーす。」

「そりゃ。」

教師は何事もなかつたように授業を始める。

この学校で彼女に口出しできる人など、いないのであらう。

「」の問題を、藤峰。」

「はー。」

すらすらと黒板に書いた。

「正解。

お前らも藤峰を見習えよー。」

「ふあーー。」

「ほーー。」

「じゃ、教科書36ページを・・・」

「先生。」

新一は声をあげた。

「体調が悪いんで、保健室行つて来ていいですか?」

「ああ、わかつた。」

(取り合えず・・・早乙女アゲハを探すか。)

==屋上==

「どうにもいねえとなると……」

「

ガチャ

「運良く鍵が壊れてるし……」

「早乙女……いるか?」

「……んだよ、お前……」

「昨日転校してきた……」

「知ってるんだよ、そんなこと。
あたしが聞きたいのは、何でここにいるかってこと。
あたしの睡眠時間を邪魔しないでくれる?」

「……いいよな、いい……
ちょうど風当たりがいいし。」

「つて、話し聞いてねえだろ……
ちゃつかりこつちまで来てるし。」

「俺も向こうの学校で結構サボつてた。」

「え? あんたも問題児なの?」

目を丸くさせて聞いてきた。

「……いや、授業のレベルが合わなくて。」

「嫌味かよ。」

「まあ、その度怒りられてたけどな。」

「ふーん。

あんた、不思議だね。」

「何が?」

「あたしを見る田が他と違ひ。」

「田?」

「金持ちの娘とか、問題児とか、不良とかを見る田でも……顔や体田当てでもない……あんた、ただ者じやないでしょ?」

ギクッ

(句で女はそう、勘がいいんだろうな……)

「ただ者だよ。」

「ま、そつだよね・・やせ男にしか見えない。」

「あのせ、やせ男とかやめてくんない?
俺、ちゃんとした名前があんだけど・・・」

「・・・あたし、信用した人しか名前で呼ばないから。
あなたにはやせ男で十分。」

「あ、そ・・・」

(まだまだ手)わいよな・・・

「私、寝るから・・・とつとと出て行つて。」

「へいへい・・・」

「それと、あたしがここに居るつてちくんなよ。
鍵を直されかねないんだから。」

「言わねえよ。」

「俺のお気に入りの場所がなくなる。」

「勝手に氣に入つてんじやねえよ。」

「はいはい。」

ガチャン

ドアを閉めた。

上手くいきかけたんですけどね・・・

そんな簡単に上手くいくわけがないです！！

(おいおい・・・)

「ずっと思つてたんだナゾよ。」

「？」

「藤峰つむりステリアスだよな。」

「言い出したのは、
転校初日から新一にベッタリの植田智弘だった。」

「自分のこと何にもはなさねじやねえか。」

「そうか？」

「勉強もスポーツも出来る・・・
でも、特技がなんだとか、苦手なのは・・・とかわからんねじや
ん。」

「言つてねえからな。」

「なあ、教えるよ〜。」

智弘はただを捏ねるよつて新一に言った。

「じゃあ、特技は？」

「リフティング、謎解き、射的、モーターボートと車の操縦。」

「へえ。車……」

「ハワイで父さんに教えてもらつたんだよ。」

「ふーん。んじゃ、苦手なのは？」

「音楽、料理、母さん、おばさんに、園子、灰原に……」

「おいおい、人物になつてるわ。それに園子つて？もしかして、彼女とか？」

智弘は瞳を輝かせた。

「ちげーよ、ただの友達。」

「そつか。じゃあ次は趣味。」

「読書。」

次々と出でてくる質問に新一はめんべくせりうに答えた。

「嫌いなのは？」

「ラブストーリーとか。」

「嫌いそうだもんな。んじゃ尊敬する人……とか。
あ、いねえよなー！」

「両親とホームズ。」

「あ、いるんだ……」

「まあな。」

「じゃ、次は……好きなの。」

「蘭……」

「へー。」

新一は慌てて口をふさぐ。

「どうかしたか？」

「でも、知らなかつた。藤峰が花が好きなんてさ。」

「あ……花……」

「ん？違ひのか？」

「い、いやー、そなんだ。」

（蘭が花の名前で助かつた・・・）

「じゃあ、最後。嫌いなものは？」

「レーズン。」

「レーズン・・・俺、好きなんだけど。」

「あ、そう。」

「なんだよ、興味ねえみたいにーー！」

「興味ねえし。」

「ふ~じ~み~ね~ーー！」

「男子つて、仲いいよね。
ま、それがうちのクラスのいいところだけど?」

「だね。」

ガラツ

「アゲハ・・・」

突然アゲハが入ってくる。

「なにー？ 遅刻？ アゲハつてばやるうーー！」

「・・・んだよ。」

「え？」

「うつさいんだよ。 あたしに話しかけないでくれる？」

「・・・なつ・・・ー。」

「何？なんか文句でもあるの？」

「いいよ、何でも言えば？ あたしは別にどうってことないから。 ただ・・・暴力でもふるつてみな。 あんた、即退学だからね。」

「

「・・・」

「いつわれちやあ、何もいえない。

「調子にのんなよー」

「あんたなんか、金と顔と体とつりやえばあんたには
何も残んないんだからね！ー！」

「で？」

「で、って・・・」

「結局、あたじがつりやえしinでしょ？」

「なこ・・・」

「あたしは、金と顔と体があれば十分だから。
友情とか愛情とかそんな温いじつこ遊びなんてしまつぴりじめんだ
しね。」

そう言つてアゲハは再び、教室から出て行つた。

「ムカツク……」

「氣にかかる」となじよ、奈々子。」

「せうだよ。あんたには脚がついてるんだからさ。」

「あらがと……。」

（あいつ、 相当な嫌われものだな……）

まだまだ続きます！！

アゲハちゃんの波乱な一日が・・・。

これからまた、平日は予約更新となります。
ご了承ください。

『ト。新一。

おはようー潜入調査、今日もがんばってね。
ちゃんと栄養取ってる?それだけが心配だわ···。
それじゃあね、藤峰新くん?

蘭。

「それだけってなあ···」

蘭の文面に新一は笑みをこぼす。

「なーに見てんだよ、工藤」

「別になんでもねーよ。」

「なんでもねーわけねえだろー見せぶりよーーー。」

「無理。」

「嘘つかよ。」

見られたら、バレてしまう。

何もかもが。

「まあ、いいけじやー。」

それより、お前が早乙女を好きだつて本当か?」

「はあ?」

「結構広まつてるぜ?」

お前、早乙女のこと聞こてるだろ?」

「まあ、隣だから。」

「隣だからってあんな風にきかねえよ。」

「誰だつて好きだからだつて思つに決まつてる。」

「そんなもんか?」

「そんなもんだ。」

「別にそんな感情ねえんだけどな・・・」

つぶやくよひ語った。

「お前がやうこいつもじじやなへても、周りはやうひ思つてんだよ。」

智弘は呆れたように新一を見た。

「はあ？」

「あんた、猫？」

ガチャ

「勝手にあたしの場所に居座つてや。」

「この屋上の鍵が壊れてるのあたしへりいしか知つてなかつたの。」

「

「へえ。」

「居るのはかまわないけど、あたしの邪魔だけはしないでよ。半径一㍍近くかないで。」

「はいはい。」

アゲハはお弁当を取り出した。

「結構家庭的な弁当なんだな。」

「うつさいわね。悪かつたわね、お嬢様ひじくなくてー。」

「そんなこと言つてねえだろ。」

「あなたのお弁当はお母さんの手作り?」

「いや、わつこうわけじや・・・。」

「自分で?」

「それもひょっと、違つ・・・」

「変なやつ。」

（まやか、お惣菜をそのまま入れた。なんて言えねえよな・・・。蘭にあればどお惣菜はだめだつて言われてた手前・・・。）

「お前ひょど、クラスのやつひよも今みたいに騒うねえのかよ。」

「・・・なによ。あたしがあんたに心を開いてる。
とでも言つたいわけ?」

「わうじゅねえよ。」

でも、クラスのやつひよ結構冷たいだらへ。手前。」

「冷たくしてんのよあこひだよ。」

あたしちゃんとしてるつだつたんだけ。」

「ちやんとつて・・・」

「話しあはそれだけ?」

「あ、ああ・・・」

「じゃ、あたし寝るから邪魔しないでね。」

「 もう食べたのかよ。」

「 やせ男が退屈な話をしないから。」

「 はいはい・・・」

新一はなれたよひに返した。

「 食べ終わつたら出てつてね。

田障りだから。」

「 わあつてゐよ。」

新一は弁当箱を片付けると屋上から出て行つた。

「やーっと居なくなつた。

なんなんだよ、あいつ・・・。本当に猫みたいに居座りやがつて・

・

「これはあたしの場所なんだかんなつ」

次回もよろしくです^ ^ !

そ、つと中に入った。

中には誰もいない。ってわかっている。

「お邪魔します・・・」

大きな洋館。

何回も出入りしているのに、なんだかドキドキする。

それは、まぎれもなく・・・

もうつた合鍵で入ったから。

目的もなく、ただ・・・入ったから。

「寂しくて、入ったなんて新一が知つたら……。
嫌われちゃうかな。」

少し、心配する。

「新一……ちゃんと食べてるかな。」

そこも心配。

でも、一番心配なのは……

「他の人を好きになつたりしてないなかな。」

自分には何も無いから……

蘭は心配していた。

「勝手に向こうに行つて調査が失敗したら嫌だし・・・」

「 今日も来ます？」

「ええ。工藤君の姿で来たりしてるけど・・・」

「はい。警視庁に寄つたりとかしますか？」

「え？ 工藤君？」

「ええ。まあ・・・」

美和子は皿を丸くする。

「じゃあ、これ。渡してもいいですか？」

「お弁当? にしては大きいわね。
お重箱みたい。」

「はい。お重箱ですもん。」

「えー?」

「あいつの」とだから、私の言いつけ破りでレトルトとかで済ませると思つんです。
だから、少しでも栄養をつけなこと。
解決できる事件も解決できませんから。」

「あら~、ハーブラブね~やつぱつ。」

「からかわないでくださいよ~。」

「わかったわ。預かっておく。
でも、会わなくていいの?」

「はー。今ひとつ、ひとつ一緒に居たくなつますから。」

「可愛っこい」と呟つて……。」

美和子は蘭の方をぽんぽんと軽くたたいて。

「まかせなさい！」と胸を張つた。

(あれべりーの量だつたら、当分はまつよね・・・)

次回も宜しくお願いします！！

「あ、工藤君。」

「ほんわか、佐藤刑事。」

「今日も」「古勞様。

そうね、工藤君に渡さなきやいけないものあるのよ。」

「え？ 何ですか。」

「これよ。」

ビーンと迫力のある大きな風呂敷に包まれたもの。

「何ですか？ これ。」

「お重箱に入ったお弁当ですって。」

「弁当ー？」

「2時間ほど前に蘭ちゃんが置いていったのよ。さつと、自分の言いつけ破つてお惣菜とかで済ませてるだらつから……って。」

（あたつてやがる……）

「この量なら、当分はもつだらつて言つてたわよ。食べ終わつたら、ここに持つてきてちょうだい。私から渡しておつから。」

「……ありがとうござります。」

「それにしても、こめんなさいね。潜入調査を頼んだばかりに、蘭ちゃんを会えなくなつちやつて。」

「いえ、大丈夫ですよ。」

（大丈夫じゃねえけど……）

「そうへならよかつたわ。
じや、おやすみ。」

美和子は軽く手を振つて別れを告げた。

「・・・ほんと、世話を好きだよな・・。」

ロロロロ

着信：新一

「あれ、新一から？」

『弁当、サンキューな！上手かつた！！
明日から弁当に移して学校でも食うから。
あれだったら本当に当分もちそうだな。』

とりあえず、助かつた!』

「やつぱり、お惣菜で済ませてたんだ。
・・・しょーがない。また作つてやらなきや
ね。』

ケータイを片手に蘭は微笑んだ。

この時間だと・・・
こんばんわ、皆様・・・。

完璧風邪をひきました。
桜桃です。

つらいですね。

鼻声ですもん。お風になると直つてくんできぬ・・・。(苦笑)

どごどん冬に近づいております・・・
風邪には皆様、くれぐれもお気をつかって下さい・・・。
それでは、次回も宜しくお願ひします。

力チャ . .

「お、やっぱり居たー。」

「当たり前でしょ。」

新一はアゲハに近づく。

「だからー・・・」

「半径1m以内だよな。
わかつてるつて。大丈夫。」

「そう・・・」

パカッ

「・・・なんかさー、最近・・・
あんたのお弁当がなりとグレードアップしない?」

「え、?」

「だつて、卵焼き・・・すゞく家庭的な感じがある。
前までお店つて感じだったのに。」

(結構鋭いんだな・・・)」

「え? かー?」

「ま、私の知ったことじやないけどね。」

「あ、そ・・・」

「じや、私も食べるか・・・」

アゲハもお弁当箱を開いた。

「ねえ、ずっと聞いたかったんだけどさ・・・」

「ん?」

「なんでそんなに私のことをかまうわけ?」

「・・・」

「ほつといてくれればいいのに。」

「1人で居るから・・・つて同情してほしくもないしね。」

新一は軽く考える。

まさか、「お父さんの証拠を見つけるため。」などいえない。

「な、なんとなく・・・」

苦し紛れの言葉だった。

「なんとなぐり？」

「や、そつーたまたま隣だつたわけだし。」

「・・・」

怒るかと思ひ、身を守る覚悟でいた。

でも、次の瞬間聞こえてきた言葉は

「ふやけんなー！」

とか

「何考えてんの?」

などいの冷たい言葉ではなかつた。

「クスクスッ」

笑い声。

「あはははっおつかしい。何がなんとなく。よー・せひやうとマシな考え方ついつけねえのかよー。」

「わ、悪かつたな・・・」

「あ、ここだよ。」

「じゃあ、俺からも質問。」

「え？」

「何で、あいつらに心を開かないんだ？」

•
•
•

「それ、答えなきゃなんない？」

「できれば。」

「……別に、嫌いってわけじゃないの。
でもさ、お金当てだつたり、顔とか体当てだつたり……
みんな、上辺だけの私に近づいてくんの。」

「……」

「それが嫌なの……。

早乙女アゲハっていう、1人の人間として接してほしいのに……
人々、そういうやつなのかな、って思つたら……信用できなく
て。

友達がほしいのに、できない……。」

「早乙女・・・」

「わかつた?

まあ、あんたは私をそつ見てないみたいだからさ。」

「そつか。」

「それにしても、あんたは不思議ね。」

「え?」

「私を見て、好きになつたりしないの?」

「何で?」

「何でつて・・・」れでも一応、美少女つて言われてますから。
モデルと区別がつかないほどのプロポーション。
見た目は最高の女だつて言われてるの。」

「へえ。」

新一は興味なさやうに答える。

「へえってねえ・・・」

「俺、見た目なんてしらねえもん。」

「え?」

「ようは中身。 だろ?」

「わうだけど・・・」

「見た目なんて、別にどうしたことねえよ。顔はいくつでも変えられるけど、中身はそう簡単に変えられない。俺はそういう風に思ってるからさ。」

「じゃあ・・・顔がものすごいバスで、頭も運動も悪くて・・・料理も下手で、でもすげく優しかったり・・・それだけで好きになるの?」

「うーん・・・俺、好きなタイプに優しくやつって入ってねえし・・・」

「え? そうなの?」

「だったら、どうこうのが中身良しなのよ!」

アゲハは意味がわからない! とイライラしたような口づつで囁く。

(中身良しつてこいつか・・・)

俺の好きなタイプ、毛利蘭・・・だし。）

「さあな・・・俺、好きになつたやつがタイプだし。
俺が好きになつたやつが性格良し。なんじやねえの？」

「ふうん。」

アゲハは頭に？マークを浮かべながらじご飯を食べた。

アゲハちゃん、新一が好きなんですかね・・・?
私にもわかりません。
(おいおい、そんなんでいいのか・・・?)

新一が朝、教室へと向かおうとする。・・・

やけに、騒がしかった。

「喧嘩だ――喧嘩だぞ――」

「おー、誰が喧嘩してるって?」

「あ、藤峰!――早乙女だぜ、早乙女!――」

「はあ!?」

「先輩と早乙女がやうやくあつたみてーだぜ。」

(向やつてんだよ、アイツ・・・)と新一は心の中でため息をつく。

5対1。

新一はひょいと群がる廊下を除いた。

激しい音がする。

ガツシャーン

ガツタン！

言つまでもなく、アゲハが一人。

「あ、藤峰くん、おはよう。」

「はよ・・・それより、どうしたんだ?」

「アゲハが先輩にあそこで呼び出しきらつてさあ。
アンタの顔、むかつくんだよ。って言つたんだよね。」

(なんだ、それ・・・)

「で、アゲハが・・・

「そう? あたしはアンタみたいな顔にならなくてよかつたけど。
つて言つたわけ。」

「へえ・・・」

「そしたら、尽かさず先輩がいろいろ言つわけね・・・
で、しまいにはアゲハがめんどくさくなつてきたのか
うつせえんだよブス! つて言つたの。
したら先輩たち何もいえなくなつてさ。
で、この状況。」

(すげえ状況・・・)

「私、全部見ててさ。

止めたほうが良いってわかつてるんだけど、怖くて。」

「まあ、たいていの奴はそうだろうな・・・」

「い・・・つてえつ！

本氣で殴りやがつてアイシーハーー退学にしてやがれー.

「いや、本当にいたそつだな。」

「・・・見物？」

「まあ・・・そつなるかもな。」

「つたぐ、見てたんなら助けてくれたつていいんじやないの？」

「お前の場合、貸しは嫌だな？」

「・・・が、うだけど・・・。」

顔にまた一つ、アゲハは絆創膏をつけた。

「退学にある。絶対退学にあるーー。」

「まあ、落ち着けよ・・・皆お前がつらやめこんだからか・・・
お前も粗手にしなやかに・・・。」

「しゃーないでしょ？

あつたがバンバン言つてくるんだもん。
だから、黙らせようと思つて。」

「だからブスつて言つてこいわけじゃねえだろ？」

「うだけど・・・
つて、ほつとこりよーーあたしはあたしの好きなよつとあるんだ
からー

「アンタが知つたことじやないでしょーー。」

「うだけど・・・なんとなく、ほつとけねえんだよな・・・」

（なんか、蘭と灰原をくつつけたみたいな性格だし……）

「え……？」

「ま、そういうわけだから……。
あ……それと、一応それ保健室行つたほうがいいと思つぜ?
ちやんと消毒できるだろ?」
「んじゃあな。」

新一は屋上から出て行つた。

「……なんなんだよ、アイツ……。やれ野のへせ……。」

Butterfly 9 (後書き)

お、お、お?

アゲハちゃん、まさか・・・!?

なわけないか。

1人でのギヤグ?はスルーしてください・・・。

それでは、次回も宜しくお願ひします!!

「あんた、早乙女アゲハ？」

「だったら何？」

「ちよつと懲りしてくんない？」

「なんで貸さなきやいけないわけ？
話しがあるんだつたら、ここで言えば？
それとも・・・皆に聞かれたらまずこじとへ。」

アゲハの言葉に黙る女子・・・3人組。

「・・・まあ、しょうがない。
顔でもなんでも貸してやるーじゃないの。
で、どこで話す？」

「・・・付いてきて。」

この言葉にアゲハは田を点にした。

＊＊＊＊裏庭＊＊＊＊

「单刀直入に言わせてもらひうよ。
アンタ、最近調子に乗つてゐるよな。」

「調子に乗つてゐる?」

「とぼけたつて無駄よ。

私たち知つてゐるんだから。屋上で二人仲良くお弁当食べてゐるとい
う!」

「はあ?」

「藤峰君と食べてるじゃない!」

「え？ それで……？」

「それだけよ……」

「……はあ？ それだけであたしを呼び出したわけ？
勘弁してよー。」

アゲハはハア。 とため息をついた。

「アンタ、 藤峰君のなんなの！？」

「んー……付き合ってる。 って言われたい？」

「なつ……」

「アンタら、 あの男が好きなわけー？」

アゲハの言葉に3人は顔を真っ赤にさせた。

「あの男が好きな3人が集まってるんだ。」

「ち、 違うわー！」

「んじゃあ、あんたたちに詫ひの義理ないよね?」

ג עי' עי' ג

「・・・も、安心しな。

あたしとあい一はそんなんじゃなしけり

גַּם־אֶת־עַמּוֹד

「・・・まあ? 驚かないわよーーー!」

「だったら、なんでお弁当と一緒に食べてるのよ。」

「・・・ハア。あんたたち、私とあの男が付き合つてるって決め付けたいわけ？」

私が違うって言つてんだから 違うの!!!
私が信用ならんなら、あいつに聞きなさいよーー!!

•
•
•

「いいい？自慢じゃないけど、あいつにとつて私は女と見られてないのよー！」
こんな美少女を目に見て、不思議でたまらないわ。」

「…信用していいのね？」

「別に無理して信用しなくたっていいわよ。」

つーんとアゲハはそっぽを向く。

「つ、付き合つてたら、一生つらむからねーーー。」

「覚えてなさいよーーー。」

「信用したんだからねーーー。」

大声で叫びながら3人は走つていった。

「・・・だーから、別に無理しなくていいんだって・・・」

アゲハがそうつぶやいたとき、ガサガサッと草が動いた。

「ー?」

「いやー、お前つていつてもそつだけど、正當なこと言ひだよな。」

「・・・アンタ、そこに居たんだつたら助けてくれてもここんじやないの？」

モテモテのやせ男……」

そつ、草むらには新一が居た。

「俺が助けたら余計立場が悪くなるだろ?」

「・・・別に、立場が悪いのはこいつむしよ。」

「だから、これ以上悪くして庇つするんだよ、つむしよ。」

「アンタには関係ないでしょ。」

「つたぐ、可愛くねえな・・・」

どつかの誰かみたいだ・・・と新一はつぶやく。

「・・・つー余計なお世話・・・だよーー。」

近くにあつたボールを新一に投げる。

しかし、新一はそれを余裕で交わした。

「・・・俺、これでも反射神経はいいほうだから。」

「あつそ・・・。」

こんばんわ！
桜桃です。

これを予約したのは・・・金曜日だから・・・
感想の返信は明日になりますね！！
遅れて申し訳ありません・・・。
しかし、ちゃんと返しますので！

（屋上）

「ねえ。」

「ん？」

「あんたと私って恋人同士に見える？」

「ブツ」

新一は飲んでいた珈琲を噴出した。

「きたねえな。ちゃんと拭けよ？」

「わあつてるよ。」

「・・・そうだ。本当につまらなかったのか。」

「はあ？」

「そしたら、誰も文句言わないでしょ？」

「すげえ思考回路。」

「す、すごい奴隸だと思つたんだ。」

「俺、ここで彼女をつくる気ねえから。」

「はあ？ いいじゃん、フリだよ、フリー！」

「だから余計に性質が悪い。」

「なにそれー。」

アゲハは唇を尖らせた。

「ねえ。」

本田「一度田の「ねえ。」

「ん？」

そして、本田「一度田の「ん？」

「あなたの名前、何だっけ。」

「はあー…それくらい覚えとこよー。」

「悪かったわねーやや男ひて呼んでたら本当の名前がわかったのよー。」

文句あるへ。

「ねえナビ…。」

「んで、なぜは?」

「へー…じゃなくて藤峰新。」

「しん? あらたじゅなくって?」

「しん。」

「へえ…。」

「んだよ、珍しくねえだろ?」

「やうだナビ…んじゅ、よひへよ。」

(・・・ここみな、呼び捨てじゅねえし・・・)

「よろしくな。早乙女。」

「私、アンタを友達だと思つていいの?」

「どうぞ、『自由』。」

「せつか。やつと心を開ける友達ができたか。」

太陽のように微笑むアゲハの顔を初めて見る。

「・・・お前、いつもやつしてろよ。」

そして、誤解も解けるぜ。きっと・・・」

「面白くないのに笑いたくないね。
あんなふうにキャピキャピしたくない。」

「ハツハーン。」

「何よー。」

「お前、ついやましいんだる。」

「はあー?なんであたしが。あんなキャピキャピしたのに羨ましが
らなきゃ
いけねえんだよーバツカみたい。」

「ああ、やつ。」

でもよー・・・少し、心を開いてみたりびりだよ。」

「……………」

「何で」

アンタ、あたしがされてきたこと知らないから
そんなこと言えんだ・・・あんな出来事さえなければ
こんなにひどくなることはなかつた・・・
人を信用してなくとも、問題児になるぐらいまでいかなかつた・・・

「んだよ、あんな出来事つて……」

「言いたくない。」

「あのなあ、言わなかつたら俺だつて理解のしようがねえだろ。」

・・・嫌いにならない?」

涙を流すアゲハの姿をまたもや、初めての出来事。

いつもこんなに可愛くしていやあいこの子・・・

と新一はつぶやいた。

「なひねえよ。」

「・・・あたしが中2のとき・・・図書室に呼ばれたんだよね。」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「アゲハ、可愛いから。

行つておいでよ。その先輩、結構人気なんだよ？」

「でも・・・告白の返事に困る・・・。」

「そんなの、OKしちゃいなよ！本当に良い人なんだからさ。」

「・・・良子・・・。」

良子つていうのは、あたしの親友だった。

成績はトップで明るくて、人気者。

容姿しか取り柄のないあたしに初めて声をかけてくれた

親友だったの。

「図書室でしょ？」

「うん・・・」

「早く行つておこで。」

「わかつた・・・。」

図書室

「せ、先輩・・・？」

薄暗い図書室をあたしはおそるおそる・・・

声を出してみたの。

でも、次の瞬間腕が強くひつぱられていった。

「だれつー?」

「うわ、本当に来了。」

「へえ、尊じおつ、結構可愛いじやん?」

「誰なのよー。」

「俺たち、お前が最近調子に乗ってるから痛めつけてほしって依頼されたんだよねえ。ある子から。」

「誰よ、それ。」

「ん~、それはいえねえよ。」

どんどん近づいてくる無数の手。

あたしはもつづく無我夢中で・・・近くにあつたはさみを振り回したの。

何人かはかすり傷・・・。

それでもあたしは振り回し続けて・・・

逃げた。

「り、良子お。」

あたしは良子を見つけて、必死にしがみついたわ。

でも、良子はそんなあたしの腕を振り解いた。

「失敗したの？あいつら、根性なしね。」

「え・・・？」

「あいつらに依頼したの、私よ。」

「どうして・・・」

「どうして？アンタ、私の気持ちを考えたこと、ある！？
私が好きになつた男の子は皆アンタを好きになる。
私は勉強もたくさんしたし、内面をたくさん磨いた。
それでも好きになるのはみんな、可愛い子！あんた！
そんなアンタの隣に居る私がどれだけ惨めだったか・・・」

「良子・・・」

「触らないで！」

もう、限界なのよ・・・嫌なの。あなたのその顔が・・・
会つたときから、大ッ嫌いだった。」

「り・・・よう・・・」

泣き崩れるあたしを良子はあざ笑うかのよう

見下してた。

「フツねえ、何で私があんたに話しかけたか、わかる?」

「え?」

「めちゃくちゃにしてやるうつて思つたからよ。

あなたの顔見た瞬間・・

私にないものを持つているアンタをめちゃくちゃにして・・・

私は優位に立ちたかったの。

そう・・・私はストレスを・・・私のコンプレックスを発散する
ために

話しかけたの。わかつた?」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「これが、私の人を信用できなくなつた理由。

「・・・そつか。」

「何も言わねえんだ。」

「正直、今の俺には何もいえない。」

「ただ・・・あいつらがその良子つて奴と同じとは限らないねえんじやねえの？」

「・・・っわかってるわよ。」

「少し、ほんの少し、話しかけてみるよ。」

「・・・」

アゲハは黙った。

アゲハちゃんの以外な過去！？

（教室）

ガラッ

「お、おはよー。・・・アゲハ。」

「おはよー。早乙女さん。」

「早乙女さん、おはよー。」

いきなり話しかけてきたクラスメイトに

アゲハは心底驚いた。

今まで、自分を無視する「」とはあっても

話しかけてはこなかつた。

仮に、話しかけてきたとしても

面白半分にしかすがれないのだ。

『少し、ほんの少し、話しかけてみるよ。』

新一の言葉が頭を過ぎた。

「あ、まあ・・・まあよ。」

アゲハが言葉を発すと、クラクス一同は

瞳を輝かせた。

「ねえねえー。」

「よかつた。」

早乙女士さん、怖いイメージしかなかつたから・・・
話しかけられてよかつた！」

「ずっと友達になりたかつたんだ。
でも、早乙女士さん・・・きつと友達要らないだらつな・・・
つて思つてたの。」

「でも、藤峰くんとは一緒にいるだしじょ?
いひじめやしへ。」

「羨ましいなんて・・・

「藤峰くんに言つたんだよ。

どうしたら早乙女士さんと仲良くなれるかな。つて・・・
したら、思い切つて話しかけてみる。つて言われてる・・・

「やつぱり話しかけてよかつたなあ。」

アゲハは新一の姿を探した。

「あれ、藤峰は？」

「ああ、彼ならまだだけど？」

「ねえ、それよりさ、私たち皆・・・
早乙女さんと友達だつて、思つていいんだよね？」

「え？ あ・・・うん。」

アゲハがそう言つと、

一同は嬉しそうにハイタッチした。

「やつたあ！」

ずいぶん更新が遅れてしましました・・・。
すみません。

「つたく、余計な事して…！」

「はあ？」

「あたしに友達できるよつ、裏で手を回してたなんてね…」

「あんなあ、人聞きのわりに」と言つたよ…」

「だつて、そうでしょ？」

「だけど…・・・

「ま、嬉しかつたから許してあげるわ。」

「へ？」

意外な言葉に新一は目を丸くした。

「だーかーら、あつがひひに書くのはよーー!」

耳悪いのね！」

111

「なによ・・・エーも見たしきりがない。

!

「ああ思って」

「即答！？」

アゲハは「信じられない・・・」と呟いた。

「お前さ・・・やひやひつて素直になれよ。

「なに・・・それ。」

「あ、井原もーぜ。」

何事もなかつたように弁当を食べる新一に

アゲハは呆れたようにため息をついた。

「・・・なあ、早乙女。」

「なに?」

「お前も・・・ストレートにしねえのか?」

「何を。」

「髪。」

「嫌。あたし、この髪型気に入ってるの。」

「ふうん・・・
でもよー、パーマよりストレートのまつが
似合つてゐるぜ、きっと。」

少女マンガの効果音みたいなのが

アゲハの脳裏に鳴つた。

カーネツつと

アゲハの顔がみるみる赤くなつていく。

「おい、大丈夫か？熱あんじやねーの？」

「べ、べつになんでもないわよ！」

「んな」と言つたつて、顔が・・・」

「顔？あたしはもとからこんな顔よ！気にしないで……」

「……………どうした？お前

「どうした?」
「一したあ?」

「お、おま、大丈夫かよ、本当に？」

「大丈夫、大丈夫！絶好調よ！」

もう、校長先生絶好調！並よ！！

シーン・・・

「お前、キャラが・・・
本当に病院行つた方がいいんじゃねえの？」

（あたし、今なんて言つた・・・？）

アゲハには新一の言葉など聞こえてない。

（校長先生絶好調・・・
あ、あたしはなにを言つてるの・・・！?
このあたしが・・・
あいつが動搖させるからよおー）

「……」めん、おかしくなった。

「……戻ったか？」

「ええ。まあ。

お見苦しこうひ、見せて悪かったわね。」

「ほ、本当に戻った……」

「なによ、信じられない？」

「いや、もうじやねえよ。」

新一は心底ホッとしたように胸をなでおろした。

「ちょ、あんたそこまでホッとするこりゃないでしょー！？」

屋上にアゲハの声が木靈した。

ではでは・・・次回

「はよー。」

「アゲハちゃん! おは・・・・」

「ど、ビーしたの?」

アゲハを観るなり一同は目を丸くした。

それもそのはず。

一気にストレートにしたのだから。

「ん・・ちよつとイメチョン。」

「イメチョンって・・・・変わつすぎーーー。」

「ほーんとー。」

大爆笑。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……りがと。」

ゼキスツ

「くそ。ストレートにしたんだ。」

「べ、べつひー！」

「アンタに言われたからじゃないわよーー！」

「はいはい。」

「す、ストレートもいいがな、つて
思つただけなんだから！」

「わあつてー！
似合つてる。」

アゲハの挙動不審な態度に新一は目を丸くさせた。

「ま、とりあえず・・・お、お弁当だべよ。
うん、食べよー!」

「・・・本当に大丈夫か?」

「だ、大丈夫!」

「お、おこ、そんなに一気に食べたら
喉詰まらせるわ。」

「ぐつみ、水・・・!」

新一はペットボトルをアゲハに手渡す。

「ありがと・・・助かった。」

「つたぐ、言った傍から・・・」

「悪かったわね。」

「あ・・・そーだ、」の間お前に貸した本があつたる。」

「うそ。」

「あれえ、父さんのなんだナゾ、
今日中に渡さなきゃなんねえんだよ。」

「え? そつなの? 私、持つてきていな。」

「だよなー・・・ナゾ・・・・・。」

これは作戦のうしだった。

「あ、なんなら、今日の帰り、あたしん家おこでよ。
すぐ持つてくるからさ。」

「マジ?」

これを狙っていた。

「助かる！」

「あん。あたしがずっと貸してもひつてたかひね。」

「いや、俺も突然で悪かつた。」

。ベニスへお出でにならぬへやうへすがへ、お出でにならぬへやうへすがへ。

蘭と会わないまま、もうすぐ3週間が経つとしていた。

次回もよろしくです！！

力チャツ

「ただいまー。」

「お嬢様、お帰りなさいませ。
・・・あり、そちらは?」

「どうだつていいでしょ。とりあえずお茶をお出しして。」

「あ・・・はい、かしこまりました。」

メイド服を着た女性は慌てて走る。

アゲハの家は新一と同じような洋館だった。

下には赤いじゅうたんが敷かれてある。

「でかい家だな。」

「わつ?まあ、全てオヤジの金だけだね。」

新一は心の中で（麻薬で稼いだ金だな・・・）とつぶやいた。

「おめーの父さん、何やつてんだ?」

「さあ、知らない。興味ないし。」

「あつ上着はその辺においておいて。」

アゲハが指をさす方向に新一は上着を置く。

「じゃ、付いてきて。」

「ああ。」

アゲハに黙つてついていくと

白い扉の前まで案内された。

「うう、あたしの部屋。」

「へえ。」

「入る?」

「いや、いい。」

「何でよ。」

「取つて食われそうだ。」

「ちよつ人を何だと思つてんのよーー。」

「冗談だよ、冗談。」

アゲハは「冗談に聞こえないのよ・・・」とびつづけ言いながら部屋に一人で入っていく。

力チャツ

「はい、これでいいのよね。」

「ああ。サンキュー。」

「まあ、また今度違うの貸してよ。」

「ああ、わりいな。」

「何でもいいからや。」

2人で話しながら会談を降りていくと

下で話し声が聞こえてきた。

「え？ アゲハに彼氏？」

「ええ、さつきもお部屋に二人で・・・いいんですか？ 旦那様。」

「ああ。好きにしてやれ。アゲハくらいの年頃は好きことせるのが一番だ。」

「そつは言つても・・・あつお嬢様・・・お連れの方、もつお帰りですか？」

おどおどした口調にアゲハはつい、舌打ちをする。

「はあ・・・また告げ口。」

「またつて何だよ。」

「前もあつたのよ。タバコ吸つてたら見つかってさ・・・んで、オヤジにバラされた。」

あのメイド、若いせにオヤジを好きみたいでさでもあたしとは折り合いが悪くて・・・んで、オヤジとあたしに仲たがいさせて自分がその間に割り込む・

・

ま、そんな感じね。」

「へえ・・・」

新一はアゲハの洞察力について関心してしまつ。

「お前、警察関係の仕事とか向いてると頷うけた?

「なに、それ・・・。」

「おい、そこで何話してるんだ。
いちいちに降りてきなさい。」

「はーー。」

つてことで、ひとまずトマトに行こうつ。」

「そうだな。」

下まで降つるとアゲハの父はこいつやかな笑みを

新一に向けてきた。

「初めまして。アゲハさんと同じクラスの藤峰新といいます。」

「ああ、よろしく。

あ、君・・・コツクに頼んで特上のフルコースを頼むと言つてくれ。」

「わかりました。」

「ちょっと、パパ。

彼はもう帰るのよ?長居させたら困るわ。」

「おお、そうか。」

「いえ、大丈夫ですよ。」

「え?」

新一はアゲハに大丈夫だ。と口パクした。

「大丈夫なんだつたら……」

「じゃあ、パパ。

最高のおもてなしをしなきゃね。」

「ああ、やうだな。

じゃあ私は着替えてくる。先に座つてくれ。」

「はい、パパ。」

アゲハの父の背中が見えなくなるまで見つめた。

「……おい。」

「なに?」

「口調がえらい違つみてーだけど……」

「ああ……しうがないでしょ。

ちやんとしこなないと、いろいろ面倒だし。」

「へえ。」

「ちなみに、タバコのときは社会勉強だとか言つて

泣いといたらスルッと許してくれたの。」

「すんげー度胸。」

「親をだますなんてこねぐらうどうか」となにのよ。」

アゲハはしきりとして言った。

次回は楽しい

お夕食
・・・?

力
チャ

静かに食器の音だけが聞こえる。

「アゲハ、食器で音を立てちゃ いかん。」

「・・・すみません、パパ。」

「ヒカル、・・・藤、峰くんだったかい?」

「はい。」

「アゲハとはお付き合ってたのかね?」

アゲハは飲んでいた飲み物を噴出してしまった。

「お、お嬢様……」

「（うめんなさい、フキンをお願い。」

「はい、どうぞ。」

「あらがとう。」

「アゲハ、どうした。」

「すみません。

あまりにも唐突の言葉だったから……
パパ、彼と私はただのお友達よ。」

「ただの友達を家に呼ぶのか？」

「呼んだんじゃないわ。

本を返しただけよ。ただそれだけ。」

「はあ……」

アゲハの父はワイングラスを片手にとる。

「じゃあ・・・お互いにその感情は?」

「ないわよ。」

「僕もないです。」

心底残念そうに顔を暗くする。

「君ならアゲハを任せられると思つたんだけどな・・・」

「勝手に決めないでよ。」

「私は好きな人くらい自分で決めますから。」

「そりが・・・」

「・・・ところで、失礼ですがお聞きしていいですか?」

「なんだい？」

「職業は何を？」

新一の言葉に一瞬、手が止まつた。

しかし、笑顔をつくる。

「・・・経営だよ。」

「へえ・・・僕、将来は自分の会社を設立させようと思つてゐるんで
す。」

「ほお、それは壮大な夢だね。」

「はい。だから今のうちにいろいろと社会勉強を。
差し支えがなかつたら、お仕事の内容など・・・
教えてもらいたいんですけど。」

新一はとことん追い込んだ。

内心、とても焦つてゐる。

3週間、蘭に会っていない。

そろそろ限界だつた。

「 そうだな・・・君くらいなら教えてもいいだろ。」

「え？」

意外な言葉に新一は目を丸くさせた。

「いろいろチーン店を出しているんだ。」

「名前は？」

「Stone Hill」っていうんだよ。

「Stone ハイヒールでいいから、今女子高生に話題のチュー
ン店じやない。」

あつちこつちにあつて便利だつて有名な・・・。」

「ああ、全て高校の近くにして若こ子こ氣をひくつてこう

作戦なんだ。」

「・・・パパが経営してたんだ。知らなかつた。」

「はははっ」

「・・・」

「（）」馳走様でした。」

「また、いつでも来るといい。」

「じゃあ、またね。藤峰。」

「これ、アゲハ。呼び捨てにするな。」

「・・・藤峰くん、またね。」

「ああ、またな。それじゃ、失礼しました！」

新一は最後の最後まで笑顔を振りまいた。

さてさて・・・どうなるか!?

新一は現状報告のため警視庁に来ていた。

「え？ 確定？」

「はい。早乙女アゲハの父は麻薬密売人で
ほぼ確定です。」

あまりにも証拠がないため、

警察も もしかしたら違うのではないかと諦めかけていた。

「でも、その根拠はなんなの？」藤君。

「Stone Hillです。」

「Stone Hill?」

「そのチーン店、知っていますか?」

「あ、僕知っています。中高生をターゲットとした店ですね。」

「ああ・・・そんな店、あったのね。」

「まあ、佐藤さんは中高生とあまり遠くないでしょ。」

「なによ、高木くん。私が年増とでも言いたいの?」

「い、いえ・・・そうじゃなくて・・・」

「あれ? その店の名前・・・Stone Hillって聞いたことあるわね・・・。」

「聞いたことがあります。当然ですよ。」

新一は意味ありげに笑う。

「Stone Hillは石坂組が経営している店なんですか?」

「え？」

「Stone-Hengeは石と坂を英語にしたもの・・・だから僕もすべく」ペンときました。」

「なるほどね。」

「でも、さうと彼は下の下ですね。」

「え？」

「麻薬を受け取つて売買するだけの下端ですよ。いわゆる・・・関係者。になりますね。」

新一は淡々としゃべる。

「それより、さうと聞きたかったんですけど・・・」

「何だね？」

「麻薬つて1課の仕事じゃないですよね。なんで警部たちが調べてるんですか？」

「・・・麻薬だけじゃないのよ。」

静かに口を開く。

「え？」

「殺人の容疑も掛かってるの。
だからね、工藤君・・・その証拠も揃んでほしいんだけど。」

「お願い・・・できるかな？」

佐藤刑事と高木刑事は手を合わせた。

「・・・わかりました。」

（蘭と呂つ口が遠ざかってこくのは氣のせいか・・・？）

新一は心の中で小さくつぶやいた。

捕まるのでしょうか？

アゲハ父・・・。

蘭視点です!!

そろそろ・・・食べ終わつただろうか。

約1週間前にお弁当を渡したきり。

一応長持ちするやつなおかずとしたけど・・・

新一と会わなくなつて3週間。

いい加減、そろそろ会いたい。

前は少しだけ、ほんの少しだけ・・・平氣だった。

あの時は傍にいるだけで良い。

なんて思つてたのに

思いが通じたら

毎日会いたい。なんて思つてしまつ。

欲張りだよね。

ピンポン

「はーい。」

「蘭ちゃん? 私だけ?」

「佐藤刑事?」

あ、ひょっと待っててください。今開けます。」

力チャ

「元気にしてた?」

「はい。なんとか・・・

「その顔は工藤君に会えなくて寂しがつてたわね。」

「もう、からかわないでください。」

私の反応をあきらかに楽しんでいた。

「まあ、それはそうと・・・昨日工藤君がきたから貰ったのはいい、どうぞ」

「あ・・・お弁当。」

「ちやんと綺麗に食べたみたいね。
蘭ちゃんに貰つたときより随分軽くなつてるわ。」

「……よかつた。」

「工藤君が蘭ちやんの手料理を残すばずないと思ひたがい。」

「佐藤刑事……」

私が軽く睨むと佐藤刑事は乾いた笑みを残す。

「じゃ、これを渡しに来たよいなもんだから。
そろそろ行かないと……」

「あ……頑張ってくださいね。」

「ありがと。その言葉、工藤君にも行つてあげて。」

「はい。」

・・・いいなあ。

帰つていく佐藤刑事の後姿を見て私は思つ。

佐藤刑事は新一に会えるんだもんね。

・・・お仕事だから仕方ないけど。

いいな・・・

私も、会いたいのに・・・。

すゞく遠い・・・。

待つて。つて。。。

また言われちゃった。

待つてくれ。つて言葉に私すごく敏感になつたかもしれない。

トラウマ・・・なのかな。

バカね、新一はもう何処にも行かないのに。。。

可愛い女の子に言い寄られてないかな。

他の子、好きになつてない？

答えてくれもしないの?、私は心の中で質問を繰り返す。

私のこと、忘れちゃってるかな?

考へてもしょうがないよ。

・・・お弁当、作るわ。

新一が好きでしうがない蘭。

を書いてみました。

「ナラニヤセ・・・藤峰。」

「？」

「あたし、なーんか監視されてるみたいに思ひただよな。」

ギグツ

新一は背筋を伸べて伸びた。

それもその筈。

監視力メラをつけたのだから。

新一はトイレに行かへと黙つていたるといふアベヌによつ

「気のせこじやねえか？」

「わうかなあ。」

「わうわう。」

「なら、いいんだけじゃ。」

アゲハはそれだけ言つと弁当箱を開いた。

「・・・それより、『めんね。』

「え？」

「オヤジのこと。

あんな風に和氣藪々とされちやつたから困るよね。」

「ああ・・・別にわうでもねえよ。」

「せう言つてくれたらいいんだけど・・・
オヤジ、ああいうかんじだからや。
ほーんと、クソオヤジ。」

父親のことを散々に言つてゐるが、アゲハは楽しそうだつた。

その姿に新一の心も痛む。

彼女の父親は麻薬どころか、殺人の容疑までかかっているのだから。

「ま、あんなクソオヤジでも、私のたつた一人の父親なんだけどさ。
どうしようもないクソオヤジだけね。」

「ううだな・・・」

「そーいや、あのメイド最近よそよそしいんだよなー
オヤジとなんかあつたんかな・・・
ま、どーでもいいけどお。」

ふああと大きな欠伸をしてアゲハは横たわつた。

「ねえ、頭痛い。

膝枕してよ・・・。」

「・・・そーいつのは好きな男にしてもいいぞ。」

「えー・・・」

「俺も好きな女にしかやらねえから。」

「・・・私は好きな女に入らないの?」

時が一瞬止まる。

「・・・友達として、好きかつて聞いてるの。」

「ああ・・・なんだそつか。」

「当たり前でしょ？」

アゲハもじめきしながら冷静を保つ。

なんであんなこと言つてしまつたんだろ？と今更後悔。

「お前は好きだよ。結構さげすみしてゐる。
でもう・・・恋とか愛じやねえだろ？」

ズキンッ

アゲハの心に重くのしかかる。

「やうだやう・・・」

「あ、本当に好きなやつができるたとえまだ
楽しみにしてよな。」

「・・・<二>。」

感想 & 評価

お待ちしております

新一視点です。

殺人の証拠も見つけなきやなんねーし···

本当に一ヶ月で終わるかどうか不安だな、こりや。

まあ、凶器が見つかってないってことは···

どこのかに隠してあるってことだよな。

家···か。

そつちの線のほうが濃いよな。

どう都えたつて。

しかし、凶器をこまだ持つてゐることほど

リスクの高いことをするか？普通

まじめに感じし場所に自信があるのか・・・。

「…………ね。」

でも、どこか遠くに捨てるより

安心はするよな、自分の近くへあったまうが・・・。

「藤峰……」

「うわっ……なんだよ、早乙女か。」

「悪かったわね、あたしで。

色気ムンムンのセクシー美女のまうが良かった？

「バカ言つてんじやねえよ。」

「考え事してたんだ、考え事。」

「考え事お？」

早乙女は苦笑しつゝ呟く。

「あ・・・やつだ。お前の父さん、この口・・・何処に行つてたか覚えてるか?」

俺は口付の書いたところを指差す。

これは、殺害口。

「さあ? 知らなーい。」

「・・・やつば、やつだよな、結構まだだし。」

「やつだよ。」

人生そんなうまくできてねえよな。

俺は乾いた笑みをもらす。

「・・・あ。そういうや・・・」

「なんか思い出したか！？」

「んー・・・確かに、オヤジ・・・
ベッちやベッちやになつて帰つてきたんだよね・・・
多分その日だとと思ひ。」

「べッちやベッちや・?」

「つさ。

まあ、雨が降つてたから別にどうかしたことないんだけ・・・ど・・・

・
つて藤峰？聞いてるー・?」

早乙女の声はすでに俺の頭には入つてこなかつた。

ひたすら警部達の言葉を思い出す。

『被害者が殺された場所の近くで血が広範囲で広がっていたんだよ。』

『

『広範囲?』

『ええ、そりゃあもうバーッとね。』

『絵の具を飛び散らしたんじゃないかつて思ったくらいだったよ。』

『そんなに広かつたんですか?』

『広かつたつてのもあるんだけど、水に混ぜた感じだったのよ。で、血だから茶色になつてるでしょ?』

『スケッチした人が絵の具を含ませた水を間違つてこぼしてしまつたんじゃないかつて

『思つたんだけど・・・』

『あまりにも広範囲だつたんで、鑑識に調べてもらつたところ・・・』

『被害者と血液が一致。』

『なるほど・・・』

『

『でも、あれよね~いくら雨が降つてたからって

『大量に返り血を浴びた犯人を誰も目撃してないってところが不思議よね。』

『ほんとですよね。』

『

『大量だつたんですねか?』

『ええ、相当な返り血だつたと思つわよ?かなり残酷なきり方をされてたから。』

』

溺り返り血

田撃者は誰もいない

べぢゅべぢゅに濡れていた

水の呑まれた血のあと

「藤峰?」

「……つ卑乙女……」

「は、はー……？」

「Jの母のお前の父さんの服装……なんだつたか覚えてるかー?」

「え? 確か……似るだと思つた……」

「似るだな? わかつた!」

「なによ、イキナリ~。」

「悪い、早乙女!」

先生には眞偽悪にから卑退したつて言つてられ……」

「……眞偽悪が見えないんだけど……。」

新一くんはどうへ向かったのでしょうか？

「ハア、ハアツ」

新一はすつと走っていたため、息が荒い。

目の前は警視庁だ。

「早引かれておりございました。

「おお、上藤君。どうしたんだね、まだキリは学校のハズじや……」

「警部……。」

それより、わかつたんですよ、犯行の手口が！

「え？ それ、本当なの？」「藤君。」

目を丸くさせる美和子に新一は深く頷いた。

「佐藤刑事、言つてましたよね。

事件後の犯人を目撃する証言があげられてない。つて……
だから、どんな格好してたかもわからない。
ただ、早乙女の父親が関係してたことはわかつてゐる。と……」

「ええ。」

「そして、現場現状と早乙女の言葉でピーンときたんですよ。
早乙女の父親が犯行当時、どんな服装だったのか。
どうして犯行後、返り血を浴びたはずの犯人を目撃する声が無い
のか……
ということをね……。」

犯行現場は人気の少ない公園だった。

しかし、公園は町の真ん中にあり、公園を出てしまえばかなりの人

数がいる。

田撃されて当然だった。

「ぐ、工藤君！ それは・・・」

「まず、犯人は人気の少ない公園に呼び出したんです。そして、殺害・・・ここまででは皆さんもおわかりのことですよね。」

「ええ。私たちはそれから公園のトイレに凶器と返り血を浴びた服を置いたんじやないかと探したけどなかつた。」

「服はもしかしたらトイレに切り刻んで捨てたかもしれないと思つて調べたけどなにもなしだつたよ。」

「公園のどこかに埋めたかもしれんとかいろいろ考えたが・・・なにも出てこんかつたよ。」

近くの噴水で体を洗つた形跡もなかつたし・・・」

「・・・そうです。それこそが犯人の思惑だつたんですよ。」

「え？」

「犯人は雨の日じゃなければなかつた理由があります。」

「もしかして・・・犯人は雨で返り血を洗い流したの！？」

「しかし、それにはかなりの時間がかかる……」

「雨で大量の返り血を流しきるには警部の言つとおり時間がかなりかかります。

それじゃ犯人の用意したアリバイが崩れてしまつ。」

アリバイ……といつのは

早乙女の父……は会社仲間とのみに行つていた。

抜け出したのはほんの五分程度……。

とこつものだつた。

「じゃあ、犯人はどうせつて返り血を洗い流したの？」

「噴水、ですよ。」

「えー？」

「でもね、上藤君。

噴水には返り血を洗い流した形跡は見当たらなかつたんだよ。」

「そりやねうですよ、高木刑事。

犯人は服を噴水の中にいれて洗つたわけじゃありませんから。」

「じゃあ・・・」

「小さな桶に水をいれ、それを被つたんです。
ほら、銭湯とかでもやるでしょ?
ザバツと・・・。」

「でも・・・そんな桶、どこに隠すの?」

「・・・そつか!!
大きな鞄ですよ。
早乙女の愛用してる鞄、結構大きな鞄だつたらしいです。
それなら、入りますよ、きっと!」

「なるほど・・・ずっと大きな鞄を愛用していれば
犯行時にいきなりその鞄を持ってきても
怪しまれない、ということか・・・」

「はい。それに、犯人は合羽を着ていたそなんでも
濡れても平気だし・・・
しかも、犯行時に雨が降つていたのであれば合羽が濡れても
誰も怪しがつたりしませんからね。」

「ああ・・・なるほど。」

「だから犯人は雨の日じゃなければならなかつたのか・・・」

「でも、アリバイはどうなるの?..」

「ああ、それですか。」

新一はホワイトボードの前まで歩いて

ペンのキャップを外し、地図を書いていった。

「？」

「二二二が犯行当時犯人が飲んでいた居酒屋です。

そして、二二二が犯行現場。間に大通りがあるだけで距離的には近いんですよ。」

「でもね、工藤君。

居酒屋の入り口は二二二の通りを通りてこの道に入つて・・・
二二二を曲がつてつて・・・走つても2分とかかつてしまふのよ。
そこで殺害して、凶器を・・・つてやつてたら五分以上かかるわ。」

「

「トイレは二二二なんですね？」

「え？ええ・・・」

「二二二の窓・・・結構大きくて大人でも出入りできるやうです。

しかも、窓のある場所は隣の店との間で一寸にも付かない場所らしいので

出入りしても見つからないんですよ。」

「なるほど・・・」

「・・・高木君、そうとなれば犯行時にこの間から出てきた早乙女の姿を見た目撃証言を探しにいくわよ。いいですね、警部。」

美和子の言葉に田暮は深く頷く。

「行くわよー。」

「は、はー。」

れれ・・・なんども眞実へと近づいていきます・・・。

「それができたら苦労しねーよ・・・
そうだ・・・見合の口、私をやつしてよ。」

「・・・ねえ、藤峰。」

「ん?」

「縁談話がもちあがつてんだよな。」

「へえ。」

「どうやつたら断れるかな。」

「んなの、普通に嫌です。って言えばいいだろ。」

そんなアゲハの姿に父親のことがバレたら

下をうつむく。

「は？」

「・・・ダメ？」

「そういうのは自分で断らねえと。
いくら嫌な縁談話でも、相手に失礼だろ。」

「ううだけど・・・」

怒られるだらうな……と考える。

もしかしたら、一番酷なやりかたで傷つけるかもしれない。

「今の話し聞かなかつたことにして。」

「あ、ああ・・・・

「「」めん。」

アゲハが謝つたとき、新一の携帯がなる。

”田暮警部”と表示されていた。

「わり・・・・・・

それだけを残して屋上をあとじた。

「はい、上藤です。」

『上藤君、とにかく急いでいらっしゃるみたいでいいのか?』

「え?」

バンツ

「早乙女！先生こは早退つて云々てくれ！
具合悪いことか言つてさー！」

「また！？あんた何回田舎者！？」

「わりー！じゃ、頼むぞー！」

「もうー！勝手なことばっかりいつちやつてさー！
・・・そんなどこも好きなんだううな、あたし・・・」

走り去る新一の後姿を見つめながらアゲハは呟いた。

キヤー！

まさかのアゲハちゃん、乙女発言……。

「警部！」

「工藤君……取り合えず、これを見てくれ。」

指されたのはビデオテープ。

アゲハの家に取り付けた隠しカメラだった。

「偶然、映つてついたんだよ。
早乙女の決定的瞬間がね・・・・・。」

「決定的瞬間？」

「まづはこれを見てちょうつだい。」

そこには、麻薬と凶器と一緒に金庫に入れるアゲハの父の姿が映っていた。

「ほんと、工藤君のおかげよ。
数少ないカメラをよく設置してくれたわ・・・
場所によつては映されない場所もあるから・・・」

「いえ・・・場所にも限度があるので・・・
運がよかつたんだと思います。」

「運も実力のうちよ。」

ウインクしてみせる美和子に新一は笑みをこぼした。

すんごい短くてすみません！！

次回も宜しくお願いします。

アゲハちゃん視点です！

ポーッと

藤峰にむりつた本を眺めた。

白い机に寝そべって・・・眺める。

「面白い本だつてことほ、わかってるんだけどなー・・・
続きだつて気になるし。」

でも、続きよりも気になるものが邪魔をするんだ。

開いてもそればっかり頭にむりつぐ。

「つま。田を開じても考へちゃう。」

私はピンクのフリルがついた布団に

どさりと腰をおろして本を片手にとった。

「はあ。」

再度、ため息をつく。

ピー ポー ピー ポーッ

一瞬、救急車かと思った。

「パトカー？」

「やだなー、何があつたんだろう？」

窓をふと見る。

赤いランプが見えた。

事件でもあったのかな?

明日、ニュースにでもなつてたりして。

陽気なことを考えてた。

キキイ

寝よつとしていた私は動きを止めた。

「近くに止まつた・・・まさか近所!-?」

私は衝動に駆られて窓に飛びついた。

「・・・んで家に・・・?」

そして、パトカーから出てきた人物に尚も驚いた。

周りの男子より少し髪が長くて

黒ぶち眼鏡で

スラッシュした長身で・・・

工藤新一に凄く似ているイケメンで・・・

私の好きな人。

「藤峰！？」

わくわく・・・波乱の予感！？

タタタタタッ

階段を駆け下りる。

玄関先では無数の警官が居た。

「早乙女和彦・・・麻薬密売と殺人罪の容疑で逮捕する。」

「ち、ちょっと待つてよ！」

「なんでオヤジが連れて行かれなきゃなんないの！？」

人前では『パパ』と呼んでいた事なんて
氣にも留めなかつた。

「第一、殺人罪つて？麻薬密売つてなによ！
オヤジはね、絶対そんなことしてない！
証拠もなにもないのに、勝手につれてくなんて・・・
どうかしてんんじゃないの！？」

「わるいわね・・・証拠なひひやんとあるのよ。」

美和子はビデオテープを片手に持つた。

「それがなんなのよ。」

「ここに麻薬と凶器を隠してゐる貴方のお父さんが
映つてゐる。

これは立派な証拠品よ。」

「なんでもなんものが・・・」

「訳あつてわしらが派遣した探偵がこの家にカメラを設置してくれ
たんだよ。

そのおかげでここにこの証拠品が得られたつてことだ。」

「カメラ?

探偵つてなに?まさか、この使用人の中にいるつていうわけ!?

「いや、ここには関ませんよ。」

「じゃあ誰なのよー?」

「・・・俺だよ。」

「え・・あ、
藤峰！？」

信じられないものを見たような、そんな気持ちが

アゲハの心の中を渦巻いた。

「探偵つて・・・アンタが？」

・・・まさか、探偵つて・・・」

変装を解いてく新一の姿にアゲハは驚きを隠せない。

似ている。

ただそれだけだったのに・・・

まさか、本人だったなんて。

「ぐ、工藤新一！？」

「うそ・・・」

「・・・人の家にカメラ設置するなんて、
そつちこそ犯罪者なんじやないの！？
探偵だからってやって良いこと悪いことがあるでしょ？」

「いえ・・・

彼は僕たちが派遣した探偵。

カメラ設置は警視庁から命令です。
よつて彼に責任はありません。」

「なに、それ・・・」

クソオヤジ

だなんて言つてもアゲハにとつては

たつた一人の父親。

母親が居なくなつてから

たつた一人の身内。

殺人犯だろうが麻薬密売犯だろうが

大事な父親には変わりない。

「パパ！なんとか言つてよーー。」

「・・・アゲハ。Jの人たちの言つとおつだ。」

「何弱気になつてんのよー。」

「弱気なんかじやない。」

事実なんだよ。・・・すまん、アゲハ。」

「私が聞きたいのは謝りの言葉じやないーー。」

「本当にすまん・・・」

「謝るくらこなら・・・なんでやつたのよーー。」

「弱かつたんだよ・・・」

「え？」

「欲の出すぎだつた・・・つてところだ・・・
結局、暴力団に入つてしまつたし・・・」

「入つたのー？」

「いや、入つたとはいえ、下つ端の下つ端。

本部にはたどり着いてない。」

「刑事さん、だから私に石坂組の」と聞いてもなにも出でてもせん
よ。」

「知つてますよ。」

彼が・・・工藤君がそれも全て見抜いてましたから。」

「え？・・・君は、本当にすごい人間だ。

私はこれでも人を見抜く力があつたんだがね・・・
君の事を見抜けなかつた。」

「・・・それは、貴方があの時・・・仮面を身につけてたからです
よ。」

「仮面？」

「僕が夕食をご馳走になつたとき・・・
貴方は演技、してましたよね？
大企業の社長、家庭では優しき父・・・
という人物を、貴方は演じてた。」

「すごいな、そこまでわかつてたとは・・・

「わかりますよ。

あのとき、一瞬隙がありましたから。」

「隙・・・か。」

小さくつぶやいた。

そして、パトカーへと乗せられる。

アゲハはそれを呆然と眺めていた。

「早乙女さん。大丈夫ですか？」

「……なにソレ。

いきなりなんで敬語？」

「……俺は工藤新一です。

探偵の……ただの男子高校生藤峰新じゃありませんから。」

「探偵の顔、つてわけ。

じゃあ、聞くわ。探偵さん。

この家は取り上げられるのかしら？」

「いや……ここはもうローンも払われてますし手放す必要はないですよ。ですよね？ 佐藤刑事。」

「ええ、ただ……これだけの使用人を養えるか。そして授業料……いろいろあるけど、大丈夫？」

「はい。大丈夫です。」

「そり。じゃ……」

美和子はそういうと去つていった。

「・・・ねえ、藤峰新に戻つてくれない?
言いたいことがあるの。姿はそのままでいいからさ・・・」

わあ、アゲハちゃん・・・

何を言つ気なんでしょうか！？

「ねえ、藤峰。

あんたはさ、最初から父親のこと知つてたの？」

「ああ。」

「知つて近づいたの？」

「ああ。」

「父親を捕まえるのが目的であたしに近づいたの？」

「・・・そう、だ・・・」

バンッ

アゲハは本を持ってきたまま階段を駆け下りていた。

手に持っていた本を新一にぶつけた。

「さういふ事……！」

友達だつて思つてたのに！

本氣で、本氣でそう思つてたの]!-!

「さ、早乙女！俺の話を・・・

「聞きたくない！！

泣き崩れるアゲハに新一はかける言葉もなく
言われるがまま、帰つていつた。

「さひてー、さひてー・・・
藤峰のバカヤロー――――――――――――――――

「はー。」

「菊池。」

「駒田一。」

「はあー。」

「斎藤一。」

「はーーー。」

「早乙女一。」

「・・・」

「・・・早乙女一？」

「なんだ、あいつ。サボりか？」

「先生、アゲハ、朝は一回も見ません。」

「無断欠席か・・・」

新一はアゲハがいつも座っている場所・・・空席を見つめた。

苦しめた、傷つけた。

と心の中でつぶやきながら。

もう寒い時期となりました。
みなさん、風邪だけは気をつけくださいね！

コンコン

「お嬢様。

他の使用人は荷物をまとめて先ほど・・・おやめになりました。

「そう・・・貴方もやめていいのよ。」

「私は・・・残ります。」

そういういたのは

50ほどの女性・・・。

使用人頭の三郷 忍だつた。

「私にはお給料など必要ないぞいません。
なにせ、あとは老後人生が待ってるだけですからね。
お嬢様と2人で旦那様を待つております。」

「三郷さん……」

「さて・・お夕食作りましたから。
一緒に食べましよう? お嬢様。
だから早く、出てきてください・・・」

バンッ

「おつと・・・お嬢様?」

「三郷さん、ありがとうございます。本当に・・・」

「フフ、私はいつもお嬢様の味方でござりますよ。」

三郷の胸の中で泣くアゲハの頭を優しくなでる。

「・・・やういえばお客様がいらっしゃるんですけど・・・」

「お密様？」

「今、お呼びになりますね。」

「・・・お客様ってアンタか。

なんの用よ・・・もう顔も見たくないの。帰つて。

「早乙女、最初に言いたいことがあるんだ。」

「何?」

「「めん。」

「え？」

「思つたんかいつー」

「最初はさ、可愛くねえやつ……とかいろいろ思つたんだがさー……」

「え?」

「まあ、最初近づいたのはそのためだつたのは事実。
だけど……今までお前に書つたこと全部ついちゃないか?」

「……」

「しょうがないとせいえ、傷つけじめん。」

「でも・・・今は違う。今は・・・大切な・・・」

「た、大切な・・・?」

「友達だと思つてる。」

ズコッ

「あ、そう・・・」

「?」

「ブッ クスクス・・・

おっかしー！わざわざそれ言いにきたの？
バッカじやないの、アハハハハ！」

「そこまで笑うこたねえだろ・・・」

「いめん」めん。

ま、私は過剰になりすぎちゃってごめん……
友達ね、友達……クスクス

「完璧バカにしてんだろう……」

「してない、してない。」

笑いを必死にこらえた。

「ねえ、友達ってさ……」

「藤峰新として？それとも……」

「もちろん、工藤新一として、に決まつてんだろう？」

「……工藤新一と友達かあ。

友達に自慢できちゃうね。サインしておらつて……それを売ろ
う……」

「オメーなあ……」

いつものアゲハに新一は心底ホッとした。

少女漫画のラブシーンみたい。

なんて思つた方!-

気のせいですよ。

うん、気のせい!-!

無事、4週間で事件を解決した新一は

帝丹高校へと戻った。

「工藤！久しぶりだな。」

「ほーんと、事件解決おめでとー！」

「工藤・・・お祝いに俺の熱い口付けを・・・」

「氣色わらい」とすんなよー！」

「んだよ、俺の顔がきたねえつかー！」

「そういう意味じゃねえよー！」

「新一君が戻つてからますます活氣に溢れてきたね。」

「うん。」

「そりやそりや・・・

「藤君がクラスのムードを整えてるよつな
もんなんだから。」

「ま、そりやそりやうね。

「なんたつて、事件を解決させてしまつ名探偵なんだからさ。
・・・でも、女房をほつたらかすのは駄目よね。」

「園子・・・

「新一くん、アンタ、蘭に愛してる。

の一言でも言つてやつたの?

じゃないと、こへら無事に戻つてきただりつて
蘭は不安で不安でたまらないのよ。」

「ち、ちよつと園子!」

「私、そんなことないから!・・・」

「なあに言つてんの?・・・」

「やつよ、蘭!・・・

「これは藤君からの熱い口付けへりこないと!・・・」

「口付けへりこね・・・」

蘭はワナワナと震える。

「・・・あ、やつあれた。」

「おせえよ、氣づくの。」

「ど、どしょ・・・し、新一君！
あとは宣しく～。」

今がお皿やすみなのを良こ事に一齊に教室から

飛び出していく。

「蘭。」

「なに？・・・」

蘭は怒っていたわけではなかった。

涙をこらえていた。

「ただいま。」

「・・・つー

「ごめんな、こんな妙な事件・・・
引き受けちまつて。」

「新一が・・・悪いわけじゃないもん。」

「ほんと、ごめんな・・・」

「謝らないで・・・。」

新一の胸の中で泣く蘭の頭を優しくなでる。

そんな2人の姿をほほえましくクラス一同が見ていた。

まだ、波乱の予感・・・!?

なんて他愛のない一日を過ぎるはずだった。

「今日は事件のお呼ばれないんだね。」

「ああ。
この間の一件で警部たちもしまじらへ俺を呼ばないよつて頑張ってくれてるらし。」

「頑張つてつてね・・・
まあ、新一は普通の高校生なんだもんね。」

「そうだな。」

「推理が異常なくらいこ好きな。」

「一言余計。」

「あ、まじめに。」

ピンポン

「誰だろ?

私、ちょっと出でへるな。

「ああ。

「はい。」

蘭はつぶやくとカチャツとドアを開けた。

「事件の依頼かな・・・」

「早い女といいます。」

「はい。どちら様ですか?」

「……あの、じじい藤さんのお宅ですかよね。」

「はい、そうですねけど……」

「あの、失礼ですけど貴方はは？」

「え？えーと……なんて言つたらいいんでしょ……」

素直に『彼女』だと言えない蘭は一人でシドロモドロする。

「蘭、誰だつた？・・・つて・・・」

「あー！藤峰！！」

「早乙女！？」

「知り合いなの？」

「ああ。俺が潜入調査した高校のクラスメート。」

「詳しく言えば、その犯人の娘。ってわけ。」

「え！？」

蘭が驚いたように田を見張り、新一に振り返った。

新一も首を縦に振る。

「やうだつたんですか・・・」

「まあ、とつあえず あがれよ。」

「うそ。おじやまします。」

「あ、私紅茶持つて来るね。」

「ああ、頼む。」

「ねえ・・・彼女?」

「え? ああ・・・幼馴染。」

「そうなの?」

アゲハの心に灯りがともる。

「兼恋人。」

「・・・やっぱり彼女なんじゃない。」

とたんに崩れ落ちる。

「まあ・・・そうだな。」

「まあ、工藤新一に恋人が居ないわけないと思つてたけどね・・・あれだけの美人。アンタだつたらイチコロで落ちるだろうし。」

「・・・こんなこと、お前に言つたら笑われるかもしねえけど・・・俺あいつは駄目だと思つたんだ。」

「え?」

「俺がどんなに好きでも駄目だと思つてた。ずいぶんほつたらかしにしてたし・・・愛想がつきてもおかしくない。」

「・・・」

「あいつは生涯俺が好きになつた最初で最後の女だと思つ。」

「カツコいい」とばつか言ひちゃつて。」

「ほんとだよな。」

心の痛みを隠してアゲハは笑う。

力チャ

「どうぞ。

あ、これさつき焼いたクッキーです。
よかつたら食べてくださいね。」

「あ、ありがとうございます……」

「早く女、お前が気を使うなんて……」

「あんた、あたしを何だと思うんだんのよ！」

「……クスツなんか園子みたい。」

「……そーいや、そつかもな。」

「園子？」

「ああ……私の親友鈴木園子……
すつゝく貴方に似てるの。」

「令嬢には見えないお調子者つづーか・・・」

「それ、園子に言つたら怒られるよ?」

アゲハは頭の中で少し想像してみる。

「どんな子なんだろう・・・」

「これが、写真よ。」

自分が想像していたのとは全く異なったことに

驚きを隠せない。

「あ・・・自己紹介、まだだつたよね。
私は毛利蘭。よろしくね。」

「早乙女アゲハ。よろしく。」

ま、まさかの修羅場！？

でもない・・・

アゲハの突然な登場から

早一時間が経過していた。

ほのぼのと紅茶を飲む蘭に対して、

アゲハは完璧火花を散らしている。

「アゲハちゃん、紅茶のおかわりいる？」

「あ、お願い。」

「ちょっと待つてね。」

ふわっと笑つて台所へと向かう。

「藤峰……じゃなかつた……
ねえ、アンタのこと何て呼べばいい?」

「なんでも。」

「なんでもが一番困るんだけど……。
んーじゃあ……新一。でいい?」

「……ダメ。」

「なんでもいって言つたじゃん。
ウソツキヤロー。」

「わりいわりい。」

ただで、蘭以外の奴に名前で呼ばれるのはちよつといた……
ほら、他の男が蘭つて呼ぶの、嫌だと想つ……
あいつもやうだと思うから。」

「……あつや。」

じゃあ、新くんでいい? 藤峰新だつたせいが、
そつちのほうがしつくづくる。」

「ああ。」

新一が承諾したとき、ちゅうづ蘭が紅茶を持ってやってきた。

「はい、どうぞ。」

「ありがとう。
んー、おいしい。

そういうや、新くん今日は事件とかないの?
意外と暇なんだね、探偵つて。」

「ああ・・・今日はたまたまなの。
いつもは事件で出かけちゃって、
睡眠時間が一時間とか、一時間とかなくらいに忙しいの。
だから、今日はたまたま。」

「へえ。」

蘭に悪気はない。

普通に返したつもりだった。

しかし、アゲハにはそっぽ映らない。

『彼女としての余裕』だと思っていた。

見下されているよつたな感じがした。

「・・・あたし、帰るわ。」

「え?」

「あんまり長居できないのよ。」

「そつか・・・残念。」

「また、来てね。アゲハちゃん。」

「うん。」

「じゃ、また明日来るわ。」

唐突なアゲハの言葉に

啞然とする2人。

アゲハの宣誓布告だつたとは

このとき、思つてもみなかつた。

さあ、アゲハちゃんは
どんな手をつかつてくるのでしょうかー?

「やつほー！！」

「また来たのかよ。」

「なによー、いいでしょ？」

「つてか、学校はびうじた、学校はーー！」

「行つてゐるわよ。いやあんと。

学校行つてからこいつに來てるの。文句ある？」

「ねえけどよー・・・」

あの日から毎日、アゲハは工藤邸へと通つていた。

それは、あの人の良い蘭でさえ困るほど。

「今日、ハンバーグだけど・・・アゲハちゃんも食べていいく？」

「うん……。」

「じゃあ、用意するね。」

パタン

「ハンバーグかあ、最近食べてないなあ。
楽しみっ」

「おこ、少しへりこ遠慮しないよな・・・
！」

「なによー、自分でつて毎日作つてもうつてんべくせひ。
人のこと言えないんじやないの？」

そう言われば、何も言えない。

「とにかく、食つたら帰れよ。」

「ええ、ひどー。」

夜道にて一人なか弱い女性を囁かせるの。~

「あ。あ。」

「信じ、ひるなーー、信じ、ひるなーー、

ひるがーー野蛮だわ、野蛮ーー」

「野蛮になーー、

「ねえ、いじめなーー送つてよ。」

「わかった。」

「えつぽんとーー。」

「金出すからタクシーで帰れ。」

「・・・最低ーー新ぐんの意氣地なしーー。」

「あたしは元からこんなんなのーー、
だけ、心開けなかつたからあんなシンケンしあつただけーー。
お前、キャラ可笑しぐなつてないか? ずーぶん違うけどーー。
ほんとほんとこんなキャラなんだかーー。」

「んな、怒んなくていいだろ。・・・」

傍からみれば恋人同士・・・

「あ、蘭ちゃん。」

「えっと・・・お夕飯、準備できたよ?」

「わあい!新くん、行こ行こ!」

「へいへい・・後で行く。
これ片付けたらすぐだから。」

「もあ・・・蘭ちゃん、あんな奴ほつとい。
分からず屋なんだから。」

「うん・・・」

完全に立場逆転。

「ねえ、蘭ちゃん。

私と新くんが仲良くして……いや?」

「え?」

「あんな風に傍から見れば恋人同士みたいなの……してたら嫌?」

「うーん……全然。」

蘭の意外な言葉に睡然とする。

(え? だつて……あんなに悲しい表情して……強がつてないで、嫌なら嫌つて言えばいいのに。)

「じゃあ、もつとくつついても全然平氣?」

「んー……ちよつとヤキモキはするけど……大丈夫だよ。」

「……蘭ちゃんつて、意外と新くんが好きじゃないんだね。」

「え?」

「そこまで新くんが好きなわけじゃないんでしょ?」

ただ、顔も頭も良くて、スポーツが出来て・・・
おまけに名探偵。だから付き合ってるんでしょ?」

アゲハの声のトーンが段々低くなつていく。

「結局、工藤新一っていう1人の男を
蘭ちゃんは好きになつたわけじゃないんだよね?」

次回も宜しくお願ひ致します

「結局、工藤新一っていう1人の男を
蘭ちゃんは好きになつたわけじゃないんだよね？」

「好きだよ。」

「嘘！？」

「だったらそんなに平然としている訳ないじゃない！？」
「あたしだつたら嫌だもん。」

「他の女人と自分の彼氏がイチャつくの・・・」

アゲハは強く言い放つ。

「あたしに譲つてよ、新くんを・・・
あたしは好きだよ！新くんが。
どうしようもなくすきなの。」

「・・・そつか。」

「りあえず・・・座ろつか。」

穏やかな口調の蘭に思わず間抜けな声が出てしまった。そつになつた。

「そうだね・・・
私、平然としすぎたね。」

「え？」

「でもね、私は新一が好き。
これには何の嘘もないよ。」

「・・・」

「確かにね、他の女の子に「新一」って呼ばれるとか、
ベタベタされるのは・・・良い気分じやないよ。
逆に、ちょっとヤキモチ妬いちゃう。
でも、半分以上は平気なの。」

「どうして?」

「・・・新一を信じてるから。」

「信じ・・・?」

「うん。

私を好きだつて言ってくれた新一を・・・
私は信じてるから。
だからね、平気なの。」

「アゲハちゃん、新一が本当に好きなんだね。」

「うん。」

「でも、私も新一が好きだから・・・だから、アゲハちゃんの応援はできないけど友達になれたらな、って思つてるの。」

「・・・蘭ちゃんのそういうところを新くんは好きになつたのかもね・・・。」

「え?」

「どうして、そんなに新くんを信じられるの?..

「つーん・・・幼馴染として、何年も一緒に居たからかな。」

「やつか・・・。」

「どうか、すりきつしたよひに嘘く。」

「ねえ、新くん・・・モテるナビ

告白される回数、段々減つてきてると思わない?」

「アゲハちゃん……どうしてそんなこと……」

「わかるよ……」

（咄、蘭ちゃんには適わないって諦めてこいつことが……）

「あたしね、無駄だつてわかつて突っ走るほど不器用じゃ
ないのよねえ。」

「え?」

「蘭ちゃんの一言でどれだけあたしが無力なことしてたか……
実感したわ。

最初はね、絶対奪つてやるー……
つて燃えてたの。」

「……うん。」

「でも、結局ダメだつたわ。

新くんは貴方以外に好きになつたりする人なんて絶対現れない!
あたしが誓つー!」

「アゲハちゃん……」

「あたしが言うのもなんだけどさ・・・
絶対新くん、蘭ちゃんのことを死ぬ気でやつてくれないと困つかり・
・

「ひまでついていきなよ。」

「うん・・・まあ、そこがたまに困るんだけどさ。
私のために命落としそうになつたこと、何度もあるし・・・」

「えー? そつなの?」

「危ない男ねー。氣をつけてね、蘭ちゃん!」

「うん。」

こんな女子のトークを新一が最初から最後まで聞いていたとは・・・

思つてもいなかつた。

次回、最終回です！！

つと並つても・・・

今田で仕上げてしまつつもりですが・・・。

「最近、早い女来なくなつたな。」

「そうだね。

なんでもバイト三昧で忙しきりきよ。」

「へえ。

あの一件で苦労してゐるもんな・・・

やつぱり、事件はお蔵入りしてもらつたほうが良かつたか・・・

「嘘ばつかり言つちやつて。

何だかんだ言つて新一は絶対そんなことしなによ。新一にとつて、犯罪がどれほど許されないとか

私は知つてゐる。」

「蘭・・・」

「アゲハちゃんにとつても・・・
私はこれでよかつたつて思つてゐる。
だつて、なんか清清しい顔してたし。」

「やうだな。」

新一はもう一度、小説に目を通す。

「そんなことより・・・
アゲハちゃんってギャルだつて聞いたけど・・・
そんなんでもないんだね。
だつて、ストレートだつたし。」

「ああ・・・前はパーーマだつたんだよ。
しかも脱色してたし・・・
今は黒に染めてるみたいだけどな。」

「へえ。」

『

』

「あ、いけない・・・テレビつけたまんまだつた・・・
消してくるね。」

「ああ・・・」

「し、新一！ちょっと来て！……！」

しばらくしてから蘭が大きな声で新一を呼ぶ。

「なんかあつたか！？」

「これ！これ見て！！」

『衝撃の「ビデュー」を果たした

亜夏葉 乙女さん。

昨日発売されたMilk chocolate 11月の
表紙を飾りました。』

「あげは・・・おとめ？」

「これ、アゲハちゃんじゃない！？」

『Milk chocolate の表紙を飾るのはモデルの夢。
イメージに合つモ『テルは今のところじゃない。と編集者も言つてお
り、

今まで表紙は全てイラストだった。
しかし・・・2011 11号でMilk chocolate

初めての表紙を飾ったのは
新人の亜夏葉 乙女さん。』

「だつて、この顔・・・」

「つていうか、ギャルだつたこの早乙女ソックリだ・・・」

「ソックリなんじやなくて、本人なんじやないの?」

『たまたま亜夏葉さんが所属しているモデル事務所に居た編集者によると、モデル事務所に乗り込んできた彼女の勇ましさに惚れた。と言つていました。』

「やつぱり、アゲハちゃんだよね。」

「やつだと感づ。」

「はーい・・・あ、アゲハちゃん！？」

「やつほー

ね、ね、ビックリした？

その顔はビックリしたよねえ！」

「ビックリしたよー！」

「やつたね、大成功！

いやわー、あたし蘭ちゃんに負けちゃつたし・・・

ちょっと悔しかつたんだよね。

だから、脅かしてやろつと思つたわけ。

芸能人と電撃結婚しようつとか思つてたんだけビ
やつぱり難しいでしょ~」

何を言つてゐんだ、この人は・・・

と蘭は困つたように笑い始める。

「で、考えたのが、私の芸能界デビュー
売れようが売れまいが・・・
デビューしたってことに、驚かせたかったのー!」

「へ、へえ・・・」

「ああ、でも驚いてるみたいでよかつた!
これでスッキリ
振られた甲斐があるつてもんよー!..」

「よ、よかつたね・・・。」

キヤツキヤツ

と笑うアゲハに蘭は苦笑いを浮かべる。

「アゲハちゃんは、売れるよ・・・」

「え？」

「アゲハちゃん、名前の通りアゲハ蝶みたいに
どんどん可愛くなつて魅力的になつてるもん！
それに・・・ Milk chocolate の表紙飾るほど
実力があるつてこと！
だから、絶対に売れるよ。
今度は私が誓うから！」

「・・・ありがとう。蘭ちゃん。」

アゲハがそう微笑みかけたとき、

新一が気だるそうにやつて來た。

新一が驚きの声を出すまで・・

あと3秒。

はい、完結いたしました！！

今まで更新できなかつたぶん、
ドバッと更新させていただきました

今まで読んでくださつた方々・・・
何でも言って飽きてるかもしだせんが
本当に感謝していおります。

桜桃は皆様のおかげで頑張つております。

今後も宜しくお願ひします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4326x/>

Butterfly

2011年11月20日00時09分発行